



親ばか上京記（下）

娘の学位記授与式のあと、久しぶりの東京を楽しんで家に帰ると、娘から小さな小包が届いた。中には本が

一冊、常盤新平著「山の上ホテル物語」。実は、上京を決めると娘は「自分が支払うから」と東京神田の山

の上ホテルを予約してくれた。名前は聞いたことがあるが、一度も泊まったことはない。つつましく生活して

いる娘のマンションは四階だが、エレベーターはない。病気の後遺症でつえを

ついて歩く妻が四階まで上るのは大変なのでホテルを用意してくれただの

だ。山の上ホテルは御茶ノ水駅の近

清楚（そ）な雰囲気の上ホテル



く、明大通

りから急な坂道を登った閑静な丘の上にある。高級ホテルという感じではない。清楚（そ）で風格のある六階建ての、東京としては小さなホテルだ。道路を挟んで別館もあるが、本館は古いエレベーターが一台あるだけである。

フロントにあったホテルのパンフレットには三島由紀夫の言葉が載っている。

「東京の真中にかういふ静かな宿があると、は思はなかつた。設備も清潔を極め、サービスもまだ少し素人っぽ

い処が実にいい。」二泊したが、三島の言葉通りの印象を受けた。

神田周辺は出版社も多く、多くの作家がこのホテルでカンヅメ状態で原稿を書きあげたらしい。「山の上ホテル物語」によると、三島をはじめ川端康成、

井上靖、石坂洋次郎、松本清張、吉行淳之介など昭和文壇のお歴々が常宿にしたという。

昭和十二年に建てられた洋館を二十九年にホテルに改装し、創業以来、一貫して「小さなホテル」温かい、出しやばらないホスピタリティを追い続け、それが多くの作家や文化人に愛された。

由緒あるホテルにさりげなく泊めてくれ、あとから本まで送ってくれた娘の行為は、ホテルのモットーとする「出しやばらないホスピタリティ」であり、親ばかを喜ばせてくれる。

良いサービスとうまいたべものを継続させるには「小さなホテル」という創業者のモットーは、効率・利益を最優先する現代にあつて人を引きつける作家に真似してルームサービスで食事をした

まじめに写したのだが…。



が、ゆつたりとできて実にうまい。

一泊ツイインで三万円前後、安宿ばかりを愛用する習慣がある者にとつて、考え方を改めさせられた。さて、親ばかの締めくくりとして、授与式で娘が着た角帽、ガウンをホテルに持ってこ

させ、記念写真を撮ったのだが、何とせつかつたの学位記を逆さまに持つてゐるではないか。なぜ気づかなかつたと写真撮つた妻を叱責しないのもホスピタリティ。

いかにも娘らしいと大笑いになったが、実はこの写真のあと、娘から角帽とガウンを借りて偽博士が誕生した。これをここに掲載

したい気持ちもあつたが「東大の品格」をこれ以上傷つけてはと断念したのである。これをもつて親ばか

上京記を終え、今後は出しやばらないホスピタリティに心掛けるつもりである。それにしてても旅でホテルの果たす役割は大きい。（元山口放送取締役ラジオ局長）